

第 5 回 子どもと絵本1 ～ファンタジーとアニメーション～



講師 静岡福祉大学子ども学科 助教 山下 紗織 氏

1 講演にあたっての想い

本日は、少し立ち止まって保育ってなんだろうと考える機会にさせていただけたらと思います。また、日々の保育の中で、絵本を読む子どもを見る皆さんの目に、少しの変化があったり、感じたりする可能性の種をお届けできたらうれしいです。

2 実践における絵本のとりいれられ方の一例

(1) 西坂氏ら (2014) の研究報告より

幼稚園や保育所で絵本がどのように扱われているか研究したものです。絵本を用いた活動について、どのような時に絵本の使用が多いか調査しました。

研究の結果、「主となる活動の導入」、つまり絵を描いたり製作をしたり、歌を歌ったりする際の導入として使用されること、「行事やイベントの導入」として、発表会の劇などにつなげるために使用されることが多いとわかりました。そして、「絵本自体や絵本の内容を主たる題材としてイメージを膨らませたり、保育活動を創造したりするというより、すでに決まっている保育活動の内容に副った絵本を保育者が選択し、幼児を保育者に注目させて、その活動に関する知識を伝え、イメージを拡げさせるための補助的教材として使用することが多いのではないか」と考察されています。

また、保育で絵本を読む時間帯は、午睡前や帰りの集まりなど、活動の区切りが多いようです。

(2) 実習生の部分実習へのとりくみ

大学の授業では、部分実習における保育計画等の立て方を、まず実習をさせていただくクラスの実態(興味・関心)や、友人関係についての育ちを捉え、

その上で、興味・関心や人間関係のさらなる広がりへの願いやねらいを踏まえ、ねらいを達成するための内容を考えるように指導しています。

実際には、どんな遊びをしたいか考え、それに関する絵本を導入で読む、という考え方をする実習生が多い印象があります。例を挙げます。カエルが鳴く時期の実習で、紙コップを使ってカエルの鳴き声のするものの製作を考えた学生から、導入として、どんなカエルの絵本を読んだらいいか質問がありました。これが、道具としての絵本という一例になるかと思います。カエルの鳴き声のイメージを伝えたくて鳴き声の絵本を選ぶということでもなく、その学生さんが候補に挙げたのは「かえるはかえる」というようなことば遊びの絵本でした。カエルの鳴き声の遊びと選ばれた絵本には、乖離がありました。

もちろん実習生は、これから実際に子どもと関わる中で自らのものの見方が変化する可能性をじゅうぶん持っていますが、この段階では、絵本が道具として使われる側面が大きいと感じます。つまり、子どもがその絵本の世界をどのように感じ、イメージをふくらませ、自分のからだの中に取り入れているかという視点が欠けていると考えます。

(3) 『もりのなか』マリー・ホール・エッツ ぶんば まさき りこ やく

『もりのなか』から、道具としての絵本について考えてみたいと思います。

ある園では、絵本を読んだ後、子どもが絵本に登場する動物になり、動物たちと同じように楽器を演奏しながら行進する実践をしました。この実践も楽しい経験でしょう。しかし、絵本に見入る子どもがイメージしている世界とこの実践には、大きな隔た

りがあるようにも感じます。私も2歳の子どものこの絵本を読んだことがあります。子どもはしーんとして、食い入るように見ていました。

絵本を活動の導入として用いて、その後の活動に結び付けることで、子どもの中にイメージされている世界を壊してしまい、違ったものにしてしまっている可能性もあるのではないかと思うのです。そこに配慮が必要だと考えます。

また「もりの中をみんなで歩いている場面」ですが、子どもに言われて初めて気づいたことがあります。この場面と全く同じものを表紙にしていると思っていましたが、絵が微妙に違うのです。象に着目するとわかります。「あー、また遊びに行ったんだね。」と言った子どもがいました。この子どもは、表紙の場面が絵本の中の場面と少し違うので、もう1回遊びに行ったときの行列の様子が描かれていると思ったのでしょう。そのような読みをする子どもは、本当にすごいと思います。大人と子どもの視点の違いに敏感でありたいと思うのです。

3 ファンタジーとアニメーション

古田足日氏は『子どもと文化』の中で、「子どもが本を読むのは本来“おもしろいから、楽しいから”である」と述べていますが、これは皆さんも同じように感じるのだと思います。「すぐれた児童文学作品を読む活動の価値というのは、子どもがわからみると、(中略)何よりも読む子どもがその作品に精神を集中し、その作品によって精神を躍動させ、沈潜させることにあるのではないか。これはいいかえれば純粋化された時間を経験することであり、一つの美的経験である」とも述べています。

もう少しわかりやすい例として、子どもたちが砂場に砂山をつくる例を挙げます。同著の中で古田氏は「(前略)第一にはやはり“おもしろいから、楽しいから”遊ぶということであり、第二には今子どもがつくっているのは砂山でありトンネルである

だけではなく、一つの「世界」である、ということだと思う。(中略)誰かが(大人を含む)ことばを発すると、そのことばによって今までなかったイメージが触発される場合もある。こうして道や川、トンネルができ、山は姿をかえ、怪獣が出現し、心の中のイメージもかわっていく。ここでは子どもは砂に働きかけ、山やトンネルをつくることから出発した、強調していえばもう一つの別の世界、もう一つの空間と時間とを生きている。それは充実した時間、豊かな時間である」とも述べています。

砂山やトンネルをつくるのは、“楽しいから、おもしろいから”ということが第一段階にあります。その後、ただ楽しい、ただの砂の山ではなく、この砂山が子どもにとって大きな山となり、そこから怪獣が現れるのです。つまり、子どもはファンタジーの世界を生きているのです。ファンタジーを生きるという感じが、「純粋化された時間を経験すること」であり「美的経験」であり、「充実した時間、豊かな時間」をもったと考えます。我を忘れて遊び込む姿は、現場での子どもの姿と重なると思います。

もう一つ、古田氏が述べているのは、竹トンボづくりの例です。「それはぼくが子どもの時、自分がつくった竹トンボがはじめて空に舞いあがった経験をつりかえってのことだった。不器用なぼくはまめになやまされ、また何度も指に切傷をつくりながら竹トンボづくりに熱中した。すると、その到達点には青空に竹トンボが舞いあがったという喜び—精神の高揚があったという経験である。これは海賊ごっことはちがって何十日かのあいだに断続しているが、それでもやはりはじまりがありおわりがあり、竹トンボづくりという世界に身をおくことによって、純粋化された時間を持ったという、美的経験の一つである。」

竹トンボづくりにぐーっと入り込んで、竹トンボが飛んだときの空の青さを言おうとしているのだと思います。

もう一人紹介したい方が増山均氏です。アニメーションとは、ラテン語のアニマで、命・魂を活性化させることです。フランスやスペイン、スイス、イタリアなどのヨーロッパでは、文化だけでなく、芸術や教育、福祉等の幅広い分野で使われる概念です。

増山氏は、「生命力・活力を吹き込み、心身を活気づけ、すべての人間が持って生まれたその命・魂を生き生きと躍動させ、アニメーション活動は、「心地よい・気持ちいい」という経験をもたらす」「ファンタジー遊びを通して、子どもたちは心を躍らせる。まさにアニメーションそのものである」と述べています。我を忘れて遊びに没頭するということと、子どもがそこで心地よい、気持ちがいい遊びをしていることが重なると思います。教えられたことを学び、それによって人が発達していくという概念とは違い、大人も子どもも遊びや余暇を含めた活動を通してエネルギーを活性化させ、人間の根源的なところを支えるエネルギーになるということです。

4 問いへの（ひとまず）こたえ

「道具」や「方法」としてではない絵本のとりいれ方、子どもの絵本体験とはどういうものなのか」に対し、古田氏や増山氏の論考から考えると、「絵本を読んでいる子どもの「いま」がとっても充実していること」になります。子ども側から捉える視点では、絵本や童話を読んだり聞いたりすることを通して、その世界に入り込み、その世界を楽しんでいるという姿です。

またこれは未来を志向する「有用性」の原理とは異なる視点です。「有用性」とは、「～のために」「～に役立つ」ことです。有用性と道具としての絵本は結びつきやすい側面があります。例えば文字が読めるように、発表会のためになど、「～のために」の視点で見えていくと、子どもが今、どれだけ絵本の世界に入っているかを捉えることは難しくなります。

では、絵本にぐっと入り込んでいる子どもの姿を、

どう捉えたらいいのでしょうか。これは、私自身が取り組みたい課題で、皆さんとともに考えていきたいと思っています。

先ほどの砂場や竹トンボの事例にもありますが、絵本に深く入り込んでいる姿は、遊びが充実しているときの子どもの姿と重なることが多いと思います。とはいえ、それをどう捉えていくのか。一つの視点としては、子ども自らが遊びを展開していく姿。例えば、絵本にぐっと入り込んで楽しみ、それを遊びに展開していく姿です。年齢が上がると、ダイナミックな遊びに展開することもあります。ですから、発表会のためにこの絵本を読み、演じるのではなく、子どもが絵本をぐっと聞いて、遊びに展開していく。遊びに展開していることを、そのまま発表会につながるようにするという、子どもの姿を捉え、支えるイメージです。時々、「(子どもが絵本の世界に)入っている!」と感ずることも大事ではないでしょうか。ともに在るおとなが、いかに子ども一人ひとりの、読んでいる絵本の世界を感じられるかということが問われるように思います。

5 選書について

子どもがその世界に入り込めるお話とはどういうことか、絵本の表現方法に着眼して、どういう絵本を読んだらいいかについて、私が感じていることを共有できたらと思います。

私の手元には、様々な出版社の『おおかみと七ひきのこやぎ』があります。読み比べてみるととてもおもしろいのですが、ここでは福音館の『おおかみと七ひきのこやぎ』の、おおかみが声をお母さんの優しい声に変えて、手も白くしたという場面から少しだけご紹介したいと思います。

福音館の絵本は、おおかみの白い手だけが描かれています。ですから、子どもが見ると、お母さんに見えるのです。一方で、窓の上に、おおかみの目が描かれている絵本もあります。この絵本を読んだと

き、子どもは「ここ、おおかみってわかるのに、なんでこやぎはドアを開けちゃったの。」と言った子どもがいたといえます。子どもはここで、お話の世界から一歩引いてしまうのです。

また、「ところが入ってきたのは」と言い、ページをめくると「おおかみでした」という場面です。ここは子どもたちがはっと息をのむ場面です。同じ場面ですが、ある絵本では、おおかみが部屋に入ってくる場面で、「わーい、おかあさんだ」と喜ぶこやぎの様子が文章で書かれています。子どもは絵を目で追いながら絵本を読むので、ページをぱっとめくっておおかみがいると、「あ、おおかみだ」と息を飲みます。

しかし、「わーい、おかあさんだ」とこやぎが喜んでいる場面の言葉が書かれているのですが、子どもたちがみているのは、おおかみが襲い掛かってくる姿なのです。目でみている絵と耳から入ってくるお話がずれてしまっているのです。そこで子どもはまたお話の世界に入り込めないということが起きるのです。

さらに、おかあさんやぎがひどい有様を見て、「あ〜。」と言う場面があります。その場面では、左下に傘がボタンと倒れているのが見えます。おかあさんやぎが森に出かけるとき、雨が降っているわけではないのですが、傘を持っていく場面があります。その持っていた傘を落としてしまうくらいはっとするというわけです。つまり、傘の描写が、おかあさんやぎの気持ちとつながっているのです。驚いている様子を絵でもよく表しています。

言葉と絵が重なっているか、子どものドキドキハラハラ感に合う絵が描かれているかということによっても、絵本への子どもの入り込み方に違いがあることを実感しています。小さい子どもにとって、言葉は耳から入ってきます。子どもは絵だけを追っているため、前述のように、耳から入ってくる言葉と絵がずれることを体験することもあるのです。

6 実践事例より（2歳児 認可外保育所）

大学の「虫博士」からあおむしをもらい、蝶になるまで育てたという事例に、『はらぺこあおむし』の絵本が関わってくる実践です。

子どもはあおむしをじーっと見えています。この時期、『はらぺこあおむし』の絵本が本棚に置いてありました。すると子どもは絵本を手に取り、静かにページをめくります。絵本を見た後、子どもは、虫かごのところに行き、じーっと眺めます。絵本の世界と虫の世界を行ったり来たりしているのです。

ある日、あおむしは蝶になり、みんなで空に放しました。その後、子どもは、遊びの中で上に上に手を伸ばすような動きをしたり、ふわふわと舞うように保育室を歩き回ったりしました。その間も、子どもは『はらぺこあおむし』の絵本が大好きで、よく見ていました。さらにフィンガーペイントを行い、後から保育者が切り抜いて蝶の形にしました。また、窓ガラスに、絵の具を使って上に上に描こうとする姿が見られ、それは蝶が舞う様子をイメージしているようにも見えました。次第に、子どもは自分の身体にも絵の具を塗り、楽しんでいきました。

『はらぺこあおむし』の絵を描く目的で絵本を読んだのではなく、保育者の捉えではありますが、子どもは蝶になるまで育てた体験と本の世界とを結びつけ、その世界を身体や絵で表現していったのではないかと思うのです。

7 次回に向けて

子ども自ら絵本の世界を生きる、表現する実践例について、映像や事例から、もう少し具体的な絵本と子どものかかわり、そこにもとに在る保育者の視点等について考えていきたいと思えます。また、発表会につながるところで、『エルマーの冒険』を取り入れている園の実践もありますので、紹介していきます。

第5回 焼津市保育者資質向上研修会
平成30年11月30日（金）
会場：焼津公民館 大集会室